

高齢者による高齢者のための高齢化研究の構想

A proposal for cognitive science research on hyper-aging, by the aged, for the aged and others

小橋康章
Yasuaki KOBASHI

株式会社大化社・成城大学
Taikasha, Co. Ltd. and Seijo University
yasuakikobashi@gmail.com

Abstract

This article proposes JCSS's involvement in research on hyper-aging of society and individuals, mobilizing its social and other resources. The proposal is three-fold: research contents, methodology, and research community.

Keywords — hyper-aging society, cognitive science research community, gerontology, first-person perspective

1. 問題提起とその背景

この文章は高齢化、とりわけ今後現実のものになることが確実な超々高齢社会における認知科学研究の在り方に関して一つの提案を行うことを目的としている。

ちなみに一般的な用法では「超高齢社会」は高齢化率(65歳以上の人口が総人口に占める割合)が21%以上の社会を指すとされ、日本は2007年にこの段階に入ったと推計されている。2015年4月に発表された前年10月現在の推計では、高齢化率は26%である[1]。高齢者人口は2040年前後に4000万人弱で頂点に達するのを境に減少に転じると推計されているが、人口の減少も進行しているため、いずれ40%を超えると予測される高齢化率[2]はその後かなりの期間にわたって、高水準を維持するものと思われる。

少子化も今後当然解決すべき問題としてあり続けるものと思われるが、少子化の進行によって社会の高齢化が解消するものではないどころか、今世紀いっぱいには続く[2]といわれる人口減少と当分の間は並行して進行し、高い高齢化率を維持する要因になるだろう。

超々高齢社会は私が勝手に作った言葉なので、今後は単に高齢者、高齢化、超高齢社会などの用語

も使うことにする。高齢者の概念も若年者の概念も社会的に構成されたものであり、内容に即した厳密な定義は実際には難しい。

ある象徴的な出来事がある。2006年9月の日本認知科学会初代会長戸田正直先生の葬儀の時のことである。僧侶が戸田先生の事績を述べていく中で、「現在ひろく問題となっている認知症の研究に貢献され」という表現があったのだ。そこにいた多くの認知科学研究者は、恥ずかしいことだが私自身を含め、失笑したものが多かったのではないかと。私の知る限り戸田先生は認知症の研究はされていなかったし、認知症が認知科学の研究対象であるという認識は誰にもなかった、ように私には見えた。9年後の今、認知科学が当然認知症を研究対象にしているはずと認識した僧侶のほうに正しかったと確信している。認知科学が心のメカニズムの解明と支援をその任務としている以上、そうしたメカニズムの劣化や今は明らかでないそのほかの変化について放置するわけにはいかないだろう。高齢化が個人と社会の認知過程に及ぼす影響についてはわからないことが多すぎる。

以下このような問題意識に基づいた提案を第2節で、その説明と正当化を第3節で述べる。

2. 提案

いま日本認知科学会が何をすべきかに関わる提案を研究のコンテンツ、方法、研究コミュニティのあり方の3つの角度から行う。

2.1 高齢化研究のコンテンツ

高齢者の出会う認知的な諸問題など高齢化に伴う様々な問題や機会を、認知科学の重点テーマの一

つと位置付ける。

2.2 高齢化研究の方法

高齢者を実験参加者とする実験研究のほか、高齢者の一人称研究を重点的に奨励する。

また高齢化問題を個々の高齢者の個人的な問題としてとらえるだけでなく、高齢者と若年者との関係、それぞれをとりまく環境や技術との関わりとしてとらえる方法も採用する。

状況論のアクターネットワーク理論[3]のようなアプローチも、社会の高齢化の抱える問題を明らかにしたり、それを乗り越える工夫を実現するために必要だろう。一人称研究を一人称に留まらず、他の一人称研究やこれまでの認知研究と結びつけることで全体を見渡すことができるからである。

2.3 高齢化研究のコミュニティ

日本認知科学会にシニア会員制度を導入し、高齢化研究の主役を担ってもらおう。年齢、在籍年数など一定の条件を満たせば会費を無料とし、実験参加者のプールとするとともに、高齢化の一人称研究のデータ提供者、研究者として活躍の場を与える。

3. 提案の説明と正当化

上記の提案の具体的な内容となぜそのような提案になったかの説明を行う。その際、各種文献のほか2014年名古屋大学開催のJCSS大会で実施したワークショップ「超々高齢化社会における認知研究の新しい切り口を考える：29年後の日本認知科学会に向けて」(以下、ワークショップと略称、敬称略)の話題提供者(田中伸之輔・広瀬拓海、戸田山和久、齋藤洋典)、指定討論者：行場次朗、新垣紀子、諏訪正樹)やフロアの参加者からいただいた意見を適宜付加した。

3.1 高齢化研究の重点化

(1) これまでの研究の偏りと高齢化研究

認知科学の分野で発表される研究の中にも高齢者にとっての道具の使いやすさやなりすまし詐欺の被害と加齢の関係のように高齢化に焦点を当てたものが見

られるようになってはきた。しかしこれらはまだ例外であって、「認知科学」誌の発表論文の実験参加者データを見ても、若年者を観察対象としていることがほとんどであることにはかわりはない。第19巻2号(2012)から第20巻1号(2013)の一年間分では実験参加者などの対象者を必要とした論文22編のうち大学生や同等の平均年齢の人々を扱ったものが15件で68%を占めていた[4]。

「高齢化研究」とは、社会がかつてなかったほど高齢者の割合を高め、個人がかつてなかったほど高齢化する世界の中で生じる、独特の問題に答えを与える研究を指す。

社会の超々高齢化は、まだ誰も経験したことがない、人類にとってほとんど未知の現象であるから、研究材料には事欠かないものと思われる。高齢者を生産者として社会に復帰させるためにその成果を急速に社会に還元する必要もある。

ワークショップでは戸田山が高齢化問題を老人問題とみなしがちな点を指摘し、高齢者の役割を受けるものから与えるものへとシフトさせることを提案した。

(2) 研究テーマの例

いくつか思いつくままに研究テーマの例をあげるなら、

●記憶や注意、知覚の能力の減退が生活の様々な側面に与える影響の総合的な研究、戸田[5]の言う統一人間・社会科学の高齢社会版がある。これらの問題は個々にはエイジング心理学[6]や、よりひろくは老年学(ジェロントロジー)で既に扱われている。これまでの発達研究の延長上に高齢者個人の問題として高齢化をとらえることは他に譲り、それらを相互に関連させて全体像を持つことで、高齢化に対処する個々の施策の副次効果を制御しやすくする。諸認知能力が絡まりあって生じている言語の使用と高齢化の関わり[7]も視野に入るに違いない。

認知症のシミュレータを作ることができれば医師や介護者の訓練に役立つだけでなく、個別の認知機能の変化の全体としての行動への影響を検討する助けとなるだろう。

●認知能力の減退だけでなく高齢化に伴って改善さ

れる認知能力の発見、といった前向きな研究もあってよいだろう。高齢者の役割を受けるものから与えるものへとシフトさせるためにはこうした観点も欠かせない。

●高齢者の学習能力の評価と学習支援の研究も急務である。これには若年者を対象に発達してきた学習科学の成果を転用して、高齢者の、あるいは高齢者と若年者の双方を含む学習環境に適合させる必要がある。

●高齢者が働き手としてこれまでとは違う環境で有能に機能するには、発達の邪魔になる知識や習慣をキャンセルする学習解除(unlearning)の方法も開発する必要がある。[4]

●高齢者の研究者としての適性や情報通信技術を活用した支援も提案の第3点との関わりで重要である。得手不得手を知ることで若年研究者との仕事の割り振りのような問題に見通しを得ることができる。[4]

●高齢者と若年者の協働の形を考え直すことによって、異質の統合[8]にもとづいた創造的な問題解決の手段の考案も研究テーマになってよい。そのような意味で日常的なモノづくりの創造性[9]の研究も高齢化の中で新しい意味を持つだろう。

ワークショップでは、筑波大学の大学院生田中・広瀬が、高齢者の問題解決を若者が支援すべく企画したいくつかの活動が一つだけを除いて中断に至った経緯を報告した。この貴重な経験に対して、若者が高齢者に対して上から目線になるところに問題があるのではないかという質問があり、上から目線とは思わないが、高齢者側に経験や知識が多いという自意識があり、その「知っていること」を運営している学生側がうまくみ取れない、また逆に若者に考え付かなかった箇所では高齢者がつまづく、といった経験が紹介された。指定討論者の行場から高齢者を孫世代の小さい子供たちと組み合わせたほうがよいのではないかという意見が提出された。

●2014年12月27日に閣議決定した「まち・ひと・しごと創生総合戦略」に基づき、首相官邸に「日本版CCRC 構想有識者会議」が発足し、2015年2月から会合を重ねている。その目的は「希望する高齢者が健康時から移住し、自立した社会生活を継続的に営

める「日本版 CCRC」の導入に向けて、その課題及び論点を整理し、結論を得るため」とされている。

以下、三菱総合研究所[10]によって解説すると、CCRC は”Continuing Care Retirement Community”の略で、退職した(主に裕福な)高齢者が居住する環境として実現された米国の従来型”Retirement Community”が、

- (1) 介護をする施設がない
- (2) 退屈(他の世代との交流がない)
- (3) 知的な刺激が少ない

などの問題を抱えるに至った反省からできたものである。こうした CCRC がアメリカには約 2000 箇所あり、うち「大学連携型 CCRC」が約 70 ある。高齢者が若い人たちと一緒に授業を受けたり、学生たちの相談にのったりすることで、RC では得られなかった知的刺激や世代を超えた交流を実現できる。(p.115)

大学側のメリットとしては:

- ジェロントロジーの研究、
- 世代間の交流で学生の満足度を上げられる
- 資金・経営面のメリット

が期待されている。

こうした構想が日本化され、どこまで実現するのか、現時点では予測しがたい。[6]に紹介されているアメリカ、イギリス、スウェーデンの大学生に比べ日本の大学生による高齢者のイメージが著しく悪いという 1964年のデータはかなり古いとしても、小橋が学部授業中の議論で「高齢者は情報社会においてどのような存在か」という問いを向けてみたところ、大学生からは「適応能力が私たち(若者)に比べて平均的にかなり低い… 普段から情報社会を利用する機会の多い成人世代と比べたら、経験からくる勘が少ない」、「適応力の低い存在、もしくは適応力を求められていない存在」、または「IT を活用することが苦手だから、情報社会の中で生きるには向いていない」などの答えが返ってくるありさまである[4]。

現代の学生が高齢者との交流にどれだけ関心を持ち、そこから満足を得るか、関心を持ち、高齢化の諸問題の協働問題解決につながるような方法はどんなものか、などこれから研究が必要なことも多い。超々高齢社会の大学の新しい社会的役割を検討[4]する

ことが日本型 CCRC の成功にもつながるだろう。

上にあげたような研究テーマの例はもちろんほんの一部にすぎず、日本認知科学会の英知を集めて新たな問題が提起されることが望まれる。

これらは高齢者が活用できる知識を産み出し、高齢者が得意とする活動を発見することで、その生活を豊かにするという意味で「高齢者のための」研究と呼べるが、その効果は高齢者だけのために留まるものではない。

3.2 一人称研究などの新しい方法論

一人称研究は人工知能学会[11]が学会誌の特集として扱い、認知科学コミュニティにもひろがってくる兆しがある。近代的な実験心理学の勃興期に実験者自身が被験者を務める研究が多く行われ、そのことへの反省もあって、実験的な方法をよとする心理学の訓練を受けた研究者にとって、一人称的方法には慎重にならざるを得ない面があるかもしれない。しかし高齢者を年齢で一つの群にくくってみても、その動機や能力に大きなばらつきがあるのが、この群の特徴ということになるのではないと思われる。また今起きていいる超々高齢化という現象は社会レベルで見ても、個人の高齢化に伴う、たとえば認知症のような困難にしても一回性の現象であって、繰り返し実験ができるというようなものでもない。であるとすれば、超々高齢社会をよりよく理解するためにいま必要なのは川喜田のいう野外科学的な視点[8]であり、高齢者自身による高齢化の一人称研究である。

認知過程に直接関わるような病気や高齢化の影響を内側から(＝一人称で)記述したものとしては、まず神経解剖学者のジル・ボルト・テイラーが脳卒中の発病から回復までを描いた“My stroke of insight”[12]があるが、認知症に関わるものとしても古いものでは1984年にオランダで出版されたベルンレフの小説「脳の影」(Hersenschimmen, 邦訳「アウト・オブ・マインド」)がある[13]。子供のころから歳をとるということに関心があったという作家が「人間の脳の働きに魅せられるようになって」いき、「神経学に関するものならなんでも、手あたりしだいに読んだ」(日本語版に寄せ

た著者のことば)結実として生まれたのがこの作品である。当事者が一人称で自らの体験を記したものとしては40代でアルツハイマー型認知症を発病したダイアナ・F・マクゴーウインの“Living in the labyrinth”が1993年に出版されている[14]。同病の人々を「旅の仲間」(fellow travelers)と呼ぶマクゴーウインのスタンスは井庭・岡田の「旅のことば」[15]にも影響を与えているかもしれない。日本でも最近当事者による記録に基づいたモノグラフが相次いで出版されている。アルツハイマー型認知症と診断された著者が日々の中で書き溜めたメモや講演資料などをもとにまとめられた佐藤[16]やレビー小体型認知症の当事者が自らの日記を抜粋し編集してまとめた樋口[17]がその事例である。どの文献も、昔の文化人類学者や社会学者が遠隔の地に旅して持ち帰った貴重なデータやそれをまとめたモノグラフとよく似た印象を与えるし、客観的な観察のみから個人の中から見えている世界を推論することは難しいという証言にもなっている。

こうした一人称的な記録をもとに認知科学的な概念の有効性を検証したり、当事者の生活をより快適なものにする認知支援システムを考案することはできないだろうか。病理や治療の研究は医学の仕事だとしても認知症的な行動の観察やその環境とのかかわりを論じることは認知科学の役回りではないのか。認知症は症状群であっていくつかの異なる病気がこれらの症状をもたらしているが、認知症とされない「物忘れ」などは加齢に伴う普通の現象と考えられており、認知症の一人称研究(と呼んでよいだろう)の効用は高齢化研究に自然に拡張できるものだと考える。分析の枠組みとしてこれまで記憶や知識構造の研究が集積してきた知見は役に立つだろうし、日常的体験の自動記録やその構造化や効果的な検索は認知科学や人工知能研究が役に立ちそうな場面である。

3.3 高齢研究者による高齢化研究

老人学の学会など高齢化に特化した研究コミュニティはすでに存在している。しかし認知科学はそれらのコミュニティにはない視点と社会的(あるいは人的)資源をもってこの問題にアプローチすることができる。

ようやく認知科学研究者(や人工知能研究者)が高

齢化を我がこととして考える年代に達した。この機会に、彼らが新しい役割を与えられ貢献できる方法と、同時に研究者のすそ野を広げて、研究経験のない高齢者でも研究者として機能しうる方法を検討することには意義があると考ええる。

ワークショップでは齋藤が研究者がとりたいデータからとるべきデータに注意をシフトさせ、後者の企画と組織運営を行うこと、構想力を強化して新しいフィールドを創出し、確保することを提案した。

学会の会員は多くが大学の教員や職業的な研究者であり、定年退職とともに学会活動から遠ざかる例も少なくない。年金生活を送る場合は学会活動に参加する旅費はもとより学会費さえ負担に感じるケースも生じてくるはずである。彼らを学会の社会的資源と考え、学会費を無料にしてでもアイデア源やデータ源として確保しておくことを検討しても良いのではないか。

最先端の研究テーマを追うことや学会の日常的な運営をなるべく若い研究者に任せるのが日本認知科学会の創立以来の流儀であった。この伝統は守りつつ、超々高齢社会に相応しい新しい役割を高齢者が担うことになれば、学会にとっては失うものではなく、得るものだけが生じる解決策になるものと思われる。

学会の活動の中には辞典の編集や大会の運営など最先端の知識より経験や広い視野、人脈などが役に立つ分野もある。こうした仕事を意識的に高齢会員に割り振るのも一つの方法である。大会時の懇親会は国際学会であればカンファランス・ディナーやレセプション・パーティーに相当するものである。レセプションでは非会員や新しい会員、遠方からの参加者などが学会をよく知る運営委員などから文字通り応接されるのが本来の姿だが、JCSSの大会においてすら、そのようなことが起きているのを目にするのは稀である。こうしたことは高齢会員の得意とすることではないかと思われる。

会員が高齢になるにつれ、自分自身に認知症などの症状が出なくても、親の世代にそれが起き、介護などの問題を抱えることも多いと予想される。また健康や死に関わる不安も人並みに生じるであろう。認知症カフェとかデス・カフェといった、こうした共通の問題を話し合う場が生まれてきている。学会の中にそれを作

ることも検討してよいのではないだろうか。こうした場で得られる知見は本人たちの同意があれば研究に流用できるし、学会から社会へのアウトリーチの手段にもなりうる可能性を秘めている。

4. おわりに

この提案の趣旨は社会をセグメント化して「高齢者」を他の人々、例えば若年者と切り離して扱うことにはない。単にそこに今まであたっていなかった光をあてようとするものである。超々高齢社会は高齢者だけで成り立っているわけではなく、高齢者も若年者も含めさまざまな年代の人々の協力で成り立ってゆく社会である。そこで高齢者と若年者の認知的な特徴を生かした分業や協業が、そうした社会をより可能性に満ちたものにしていく条件であろう。

参考文献

- [1]総務省統計局, 人口推計 (平成 26 年 10 月 1 日 現在) retrieved 2015/07/20 <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2014np/index.htm>
- [2]鬼頭宏, (2011) 『2100 年、人口 3 分の 1 の日本』。メディアファクトリー。
- [3]小池星多, (2012) ネットワークとしてのデザイン, In: 茂呂雄二・有元典文・青山征彦・伊藤崇・香川秀太・岡部大介編, (2012) 『状況と活動の心理学: コンセプト・方法・実践』, 新曜社, pp.142-145.
- [4]小橋康章, (2013) 超々高齢社会における大学の役割試論, 成城大学共通教育論集, No.6, pp.197-208.
- [5]戸田正直, (1971) 心理学の将来. 依田新監修・日本児童研究所編, 『児童心理学の進歩』. 金子書房, pp.335-356.
- [6]谷口幸一・佐藤眞一, (2007) 『エイジング心理学: 老いについての理解と支援』. 北大路書房.
- [7]辰巳格, (2012) 『ことばのエイジング: ことばと脳と老化の科学』. 大修館書店.
- [8]川喜田二郎, (1973) 『野外科学: 思考と探検』. 中央公論社 (中公新書).

- [9]野口尚孝・井上勝雄, (2014) 『モノづくりの創造性：持続可能なコンパクト社会の実現に向けて』. 海文堂.
- [10]三菱総合研究所編, (2013) 『シニアが輝く日本の未来：高齢社会への挑戦』. 丸善プラネット.
- [11]人工知能学会, (2013) 特集：一人称研究の勧め, 人工知能学会誌, Vol. 28, No. 5, pp. 688-753.
- [12]Tayler, J. B., (2006), *My stroke of insight*, Viking (ジル・ボルト・テイラー (竹内薫訳), (2012) 『奇跡の脳：脳科学者の脳が壊れたとき』. 新潮社 (新潮文庫)
- [13]Bernlef, J., (1984) *Hersenschimmen*, Amsterdam: Querido (J・ベルンレフ (枝川公一訳), (1996) 『アウト・オブ・マインド』. DHC.)
- [14]Diana F. McGowin (1993), *Living in the Labyrinth*. Delacorte Press (ダイアナ・フリール・マクゴーウィン(中村洋子訳). 『私が壊れる瞬間(とき)—アルツハイマー病患者の手記』. DHC.)
- [15]井庭崇・岡田誠編, (2015) 『旅のことば：認知症とともによりよく生きるためのヒント』. 丸善出版.
- [16]佐藤雅彦, (2014) 『認知症になった私が伝えたいこと』. 大月書店.
- [17]樋口直美, (2015) 『私の脳で起こったこと：レビー小体型認知症からの復活』. ブックマン社.